

私がなぜ現在の科目を選んだか

「呼吸器・感染症・アレルギー内科」

信州大学医学部内科学第一教室

曾根原 圭

私は2010年に信州大学を卒業した当時、特に志望する診療科は決まっていませんでした。まずは医師としての common sense を身につけ、その上でやりがい・興味を持ち続けられるような診療科を見つけられればと漠然と考えていました。初期研修先である長野赤十字病院の研修プログラムで一番初めにローテートしたのが呼吸器内科でした。

私の指導医は、バイタリティにあふれ診療だけでなく教育にも力を入れていました。医師になったばかりで右も左も分からない私に時に厳しくもありましたが、熱心に指導して頂けたことが、呼吸器内科を志望するきっかけになったと思います。そんな私が、呼吸器内科医になろうと決意したのは2年目に呼吸器内科を再度ローテートしていた時です。一緒にローテートしていた同期から、「お前、呼吸器内科の診療をしている

私がなぜ現在の科目を選んだか

「作業療法学」

信州大学医学部附属病院

リハビリテーション部

鈴木 朝香

私が作業療法士という夢を持ったのは高校2年生の秋でした。それまでは、自分が将来何になりたいのかははっきりとせず、ただ、人と関わることが好きだったので、人と関わる仕事がしたいと思っていました。それで、もともと好きだった英語を生かして、英語教師を考えていました。もちろん、この時は作業療法士という仕事があること自体知りませんでした。知ったのは、特別支援学校に勤務する母の、「学校に作業療法士さんが来てくれたよ」というさりげない一言を耳にしたのがきっかけでした。調べていくなかで、小児から高齢者まで幅広い世代を対象とし関わるができる作業療法士に興味を持つようになりました。高校3年生になり、オープンキャンパスに参加したり母の話聞いていくうちに作業療法士への夢が膨らんでいき

ときが一番生き生きとした表情をしているな」と言われました。私自身、意識していたわけではなく自然とそのような表情になっていたのかもしれませんが。この時、生涯の仕事にするなら呼吸器内科しかないと確信しました。

呼吸器内科の診療は、集中治療室での治療を要するARDSの症例、肺癌終末期の症例など急性期から慢性期まで幅広い領域をカバーしています。今年、呼吸器内科医になって節目の10年目になりますが、やりがい・興味はつきることはありません。大学病院では、肺癌の臨床研究を行いながら様々な呼吸器・感染症・アレルギー疾患を診療し、多忙ではありますが充実した日々を過ごしています。

最後に、内科医にとって最も必要な技術は「身体所見のとり方」だと思っています。特に身体診察（診る・聴く・触れる・感じる）の基本は呼吸器診察です。当科の初代教授が述べられた「症候は天与の黙示であり、その意味付けに心を砕くこと」という精神を大事にしなが、これからも一人の「内科医」として患者さんに最善な医療を提供できるように精進していきたいと思います。 (信大平22年卒)

ました。大学進学後、専門的な講義や臨床実習を通して身体障害に限らず精神障害、発達障害、老年期障害の領域で生活を支援していく作業療法の多様さと奥深さを実感したのを覚えています。

臨床の場に出て今年で3年目になります。多種多様な疾患、幅広い世代の対象者に作業療法を実践することの難しさ、楽しさを日々感じるなかで、私は「その人らしさ」という言葉を大切にしています。障害の有無に関わらず、性格や趣味、仕事、生活スタイルなどは人によって異なります。疾患も対象も多様な方々に対して、どうしたらその人がその人らしい生活を送ることができるのかを考えながら関わっていけるところが作業療法の魅力だと臨床にでて思うようになりました。また、患者さんだけでなく様々な職種の方々に関わらせていただき、それぞれの職種が持つ視点を共有しながら患者さんがその人らしい生活を獲得できるように、協力して支援していく大切さも感じています。

これからも努力を惜しまず、好きな英語も生かして自己研鑽に励んでいきたいと思います。

(信大大学院令2年卒)